大川小学校のガイドについて

2023.3.18大川伝承の会 佐藤敏郎

震災遺構大川小学校ガイド
http://311chiisanainochi.org/?page_id=6186

詳しくはこちらをお読みください。概要だけでなく、マニアックなことや地域の様子も解説しています。来訪者にも紹介してください。随時更新中です。

大川伝承の会で作成しているガイドページです。

◆大川伝承の会 リーフレットは こちら
◆冊子資料「小さな命の意味を考える」はこちら
◆よくある質問は こちら「Q＆A」
◆2022.6.6「伝承」を動かす

◆ 震災遺構ガイド

①管理棟（釜谷交流会館）　②釜谷の街並み　③子供たちが校庭から避難した通路　④自転車置き場　⑤位置を示す石柱　⑥校門　⑦アセンブリホール　⑧低学年棟　⑨指揮台　⑩中庭　⑪２階天井の波状痕　⑫体育館への通路　⑬野外ステージ　⑭新北上大橋　⑮北上川（追波川）　⑯校歌碑

↑クリックすると詳しい説明があります

大川伝承の会リーフレット

冊子資料「小さな命の意味を考える」

Q&A

震災遺構大川小学校から伝えるもの

大川伝承の会 佐藤敏郎

いつも心を寄せていただき、ありがとうございます。

大川小学校は2021年7月より石巻市の震災遺構となり、公共交通機関もない中、県内外から多くの皆さんが足を運ぶ「慰霊・学び」の場所となっています。そして、石巻市では新年度予算に遺構の整備費が計上されることとなりました。石巻市長はじめ関係の皆様のご尽力に感謝申し上げます。

3.11の伝承は様々な形で展開していますが、各地で「伝える先」に何を見据えているのかが問われています。

震災伝承においては、助かった命より、救えなかった命からのアプローチは難しいと言われます。命が失われた場所がほとんど遺構として保存されていないことでも分かります。
震災遺構大川小学校の最大の特徴は、多くの児童・教員の犠牲という事実です。報道等でセンセーショナルな面が切り取られ大川小のイメージになります。悲しみ、恐怖・後悔・責任…、だから「伝えにくい」「曖昧にしたい」になり、これまで議論が十分尽くされませんでした。

判決で問われたのは、意思決定が遅れ判断を誤った当日の校庭ではありません。判断ミスにつながった３.11の前の取組みです。
同じように備えが不十分だった学校は少なくありません。ただ「津波が来なかった」ので助かっただけです。けっして大川小が特別だったのではありません。
一方で、津波到達のはるか前に避難、あるいは津波が来ないのに避難した学校もたくさんあります。大川小より内陸の学校も逃げています。どちらであるべきかは明らかです。

子どもの命を守るために必要なのは、津波が迫りサイレンが鳴り響くパニックの中で正しい判断をすることではなく、パニックになる前に行動することです。「まさか」と思っても「念のために」避難する。「念のためのギア」をより早く高く入れることで、未来の多くの命を救えるはずです。

「悲しい」「かわいそう」のその先に、よりよい未来につながる意味を生み出せれば「伝えるべき」「伝えたい」内容に更新されていくはずです。そうした「意味づけ」をしていく経緯も伝えていきたいと考えています。

多くの人が訪れる場所になりました。

大川小学校を伝えるために　（伝えにくい→伝えたい）

事実（多くの児童・教員の犠牲）を伝える

恐怖・悲しみ・後悔・責任・かわいそう

伝えにくい、曖昧にしたい

↑ このラインで止まっているのではないか？

アップデート

学び＝未来・希望

- **自然の威力と防災**
  咄嗟の判断ではなく事前の備え
  畏敬の念
- **失われた日常**
  楽しく学んだモダンな校舎
  ふるさと、家族、地域
  生きる意味
- **慰霊**
  忘れない、感謝
  自他の命を思う
- **学校事故**
  組織マネジメント
  学校の在り方
- **レジリエンス、伝承**

- **展示内容、順路**
- **学習プログラム**
- **解説員養成**
- **施設管理**
- **教育委員会の連携**

2023.1 NHKニュースより

伝えたい、伝えるべき

基本事項

これらを**どの場所**で**どの順番**で伝えるか、構成を。
無理に深掘りする必要はなく、基本的な事実を伝え、その先は自分で考えてもらう。

A 震災前の学校・地域
地域に見守られ、学び遊んだ様子
モダンな校舎・恵まれた自然（海・山・川）
災害は日常を襲う

B 被害の大きさ（2023.3現在）
児童74名（死亡70、不明4）、教員10人、運転手1名
学校管理下で前例のない被害
命のかけがえなさ
向き合いにくさ

C 津波の動きと威力
到達は15：37
3.7km先の海から二階の天井までの津波
いろんな方向から何度も到達、ぶつかって渦を巻いた
津波は何度も来る、いろんな方向から来る、水だけではない

D 当日の状況
時間51分、すぐそばに山、バス、防災無線・ラジオ
子どもたちも避難を訴えた
時間・情報・手段・想定が行動につながらなかった

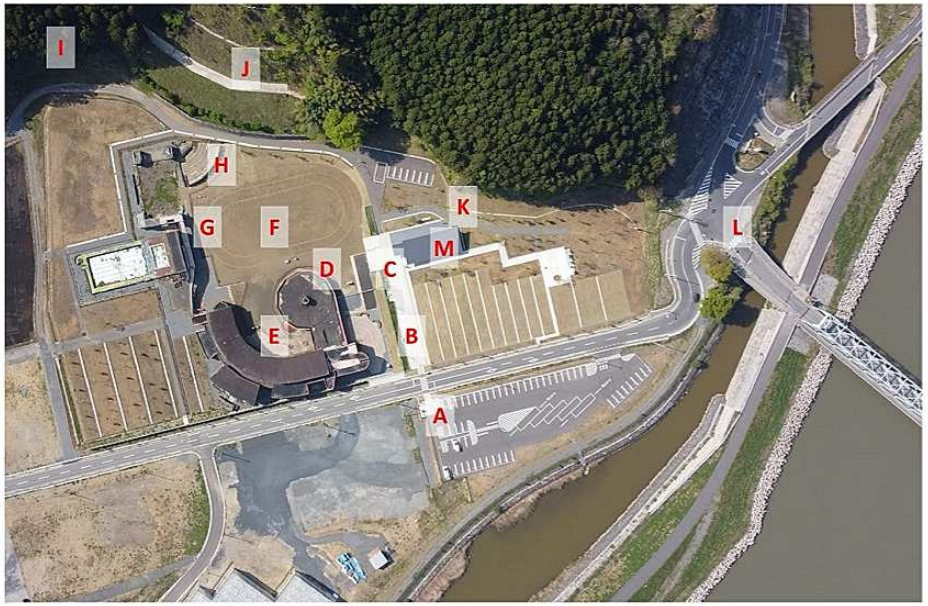
E 避難行動
指揮台の前に整列、待機が続いた
校庭から避難開始１分後津波に襲われた
山ではなく橋のたもと（三角地帯）に向かった。
途中で行き止まりだった。
意思決定が遅れパニック、方向を誤った

F 判決（2019年10月確定）
「当日」ではなく避難の意思決定の遅れにつながった
「事前の備え」が問われたもの。
子どもと一緒に波に飲まれた先生を責めていない判決。
子どもと一緒に波に飲まれた先生を責めていない

備えが不十分で、当日に判断が遅れた学校は**大川小だけではない。**
津波が到達しなかったのでたまたま助かっただけ。
事前に決めてある学校は、当日「逃げるかどうか」「どこへ逃げるか」話合いの必要はない。すぐに避難した。

津波が迫り、サイレンが鳴り響く中での正しい判断を求めるのではなく、**どのような状態で3.11を迎えたか**が重要。
子どもを預かり守る**学校の「念のため」**はどうあるべきか、**自分に置き換えて**考える。

場所ごとの解説ポイント



A 駐車場

①ここには家が建ち並ぶ街があった。
　店や診療所、交番、郵便局も
　約140軒
②校舎と校門だけが残った
③海は東側3.7km先
　そちらにも集落（長面・尾の崎）

このコンクリートのラインは一軒ずつ家があった区切り

B 献花台

①合掌（子どもたちにあいさつ）･･･必要あれば献花
②アセンブリホール（じゅうたん敷き、丸いステージ）

C 昇降口前

①昇降口・自転車置き場・ポンプ小屋
②釜谷交流会館の位置（＝現在の管理棟）
③学校の位置を示す石柱（校門前にあった）
　海抜1.12m～低い場所
④校庭から避難するときに通った通路

D 低学年棟

①全国のボランティア、児童遺族、教員遺族、卒業生、旧職員が清掃を続け、教室がとてもきれい。（現在は市が管理）
②釜谷交流会館の位置（＝現在の管理棟）
③窓や壁は津波で壊れただけではなく、ガレキを撤去するため重機で壊した部分もある。

「いつもと同じ朝でした」のメッセージボードを活用し、笑顔で学び遊んだ日常を想像する。

1985年完成の校舎（大川一小と二小が統合して開校）。当初は各学年２クラスずつ。学年の真ん中の仕切りは折りたたみ式だった。
一クラスになってからは、折りたたんだままで広く使用していた。２階の教室はその仕切りが津波で広がった様子が分かる。

E 中庭

①芝生が敷かれ、一輪車や縄跳びで遊んだ。
　桜の季節はお花見給食
②２階の天井に津波の痕がある。地面から8.6ｍ、海抜約10m。

２階天井の波状痕を見ながら津波の動きと威力を説明できる

F 校庭

①トラックの形にブロックが並んでいる。校庭だった様子を想起できる。
②当日は、強い揺れの後校舎を出て指揮台前に整列した。会館側が６年生、海側が１年。だんだん列は崩れ、１年生を上級生が囲むような隊形になった。指揮台の上にラジオ、会館前に防災無線。いずれも避難を呼びかけていた。

指揮台前に並び、避難の経緯を説明。案内板を使うか、実際のルートをたどる。

G 体育館通路

①ガラス張りの通路。ガラスのトンネルを通って体育館へ入場
②海側に倒れている。津波の威力、方向を考えるヒント
③２階の廊下の黄色い扉の枠が残っている。
④体育倉庫、運動会の用具、裏はプール、２階は更衣室
　～ここが学校だった様子を伝える

二階の廊下、黄色い扉の枠が残っている

H 野外ステージ

①卒業制作の壁画、左は大川の白鳥や海、校歌のタイトル「未来をひらく」、右は宮沢賢治の世界が描かれている。
②東側200ｍ先の観音像、慰霊碑は震災前お寺があった場所。

I しいたけ栽培の山

①校庭から約１分。通路を通らなくても、体育館の脇が通れる。ステージを横切ることもできた（ステージ脇の柵はなかった）。
②勾配は９度、津波到達点には白いラインがある。シイタケの原木が並んでいたのはちょうどその辺り。シイタケ栽培の写真は３月。
③迎えに来た保護者は山を指さし、避難を進言。子どもたちも訴えた。山に向かおうとした子たちもいた。（「津波が来る、山に逃げるぞ」と声をかけた先生もいた）

時間・情報・手段・想定が「行動」に結びつかなかったのはなぜかを考える。

J コンクリートたたき

①むき出しの崖で危険だということで2004年にコンクリートで土留めした場所。
崩れないようになったという認識。
「街を見下ろそう」という低学年の授業が２段目で行われていた。校長先生がよく写真を撮っていた。４段あり１段目でも助かった。
②勾配は９度、津波到達点には白いラインがある。シイタケの原木が並んでいたのはちょうどその辺り。シイタケ栽培の写真は３月。
③迎えに来た保護者は山を指さし、避難を進言。子どもたちも訴えた。山に向かおうとした子たちもいた。（「津波が来る、山に逃げるぞ」と声をかけた先生もいた）
④釜谷峠の方に700mほど行くと全校で植樹をしたバットの森もある。

溝があるので注意

バットの森

K 民家の裏道、行き止まり

①校庭から狭い通路を出て、交流会館の駐車場を回って民家の裏の細い道に進んだが、行き止まりで進めず。そこに津波が到達。
②5、6年生が先頭、下級生が続いた。

L 三角地帯、新北上大橋、北上川（追波川）、富士川

①新北上大橋は1976年完成。長さ566ｍ。それまでは渡し船。
②脇を流れる富士川が先にあふれ（15:32）、それを見て逃げ出し助かった人が多くいる。家を出るとき携帯電話を見たら15：35だったという人が車で逃げて助かっている。川が一気に決壊したのは15：36頃。
長面海岸の約10万本の松やガレキが橋にぶつかりダムのようになった。その分波の高さも威力も大きくなった。
③堤防が切れて通れなくなった。道路脇の間垣地区（約50軒）も壊滅した。
④三角交差点は「三角地帯」と呼ばれている。信号機よりも高い津波が襲った。
⑤泥だらけのランドセルと遺体が並べられた。